

患者を生きる

2948

がん

精巣がんの疑いですぐにでも手術を受ける必要がある。2007年3月、骨折で入院した先の病院で異変が見つかった東京都の大久保淳一さん(51)は、「なぜ自分か？」と納得できずにいた。

健康には自信があった。ランニングで体を鍛え、たばこは吸わない。30代後半から人間ドックを毎年受けていた。それなのに――。

自宅に戻り、気を取り直して病気に気がついて調べ始めた。

30力以上の医療機関のサイトのほか、がん患者の闘病ブログに

も幅広く目を通した。だが、つらい闘病体験をつづった文章にはか

り、つい目が行ってしまった。ブログの中には、闘病していた本人が亡くなり、「今までありがとうございました」といった家族

からのメッセージが掲載されたものもあった。目にするたびに、気分が落ち込んだ。

「一生懸命ネットで調べてみたけれど、前向きな気持ちになれない……」。そう感じた。

そして、「病気治療で何カ月も空席にしたら、自分の仕事は別の

闘病ブログ読み落ち込む

ネットでつながる②

誰かに取って代わられてしまうのでは？」と不安になった。勤務先の外資系証券会社の米国人上司に、英文の報告メールを送った。

「迷惑をかけてしまい、申し訳ありません」

上司は電話で「病気だからとい

って、謝らないでほしい。あなたが戻ってくることを、心から待っている」と言ってくれた。

「自分には帰る場所があるんだ」と、ひとまず安心できた。

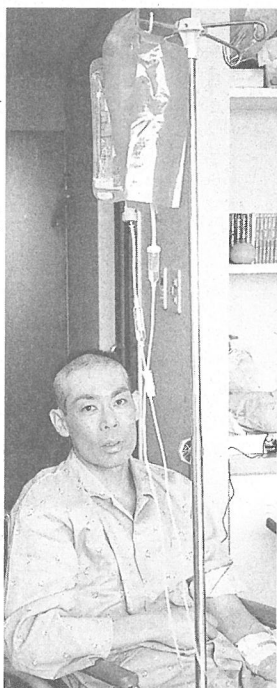
東京慈恵会医科大学附属病院(東京都港区)に再び入院。3月中旬、右側の精巣を摘出する手術を受けた。腫瘍はやはり、「精巣が

ん」だった。3月下旬、さらに追い打ちをかけるCT検査の結果が、医師から告げられた。

「腹部や首のリンパ節のほか、肺にも転移しています」。がんは進行した「ステージ3」だという。深い谷底に落ちてゆくような感覚に襲われた。

4月上旬、改めて入院。抗がん剤治療が始まった。いつ退院できるのか、見通しが立たない状況が続いた。自分の腕に刺さった点滴のチューブを見て、「囚人をつなぎとめる鎖みたいだ」と感じた。

(山本智之)



大東慈恵会医科大
付属病院に再び入
院＝本人提供